

## 第 26 回平和祈念コンサート 講演会

【司会】 お待たせいたしました。

それでは、これから、戦時体験のご講演をいただきます。

ご講演くださるのは、区内在住のせきぐちともこ関口友子様でいらっしゃいます。

関口様の亡き夫である関口ときち登吉様は大正 9 年のお生まれで、昭和19年、25歳のときに戦地に召集されました。

その後、間もなく終戦となりましたが、日本に帰国されることなく、旧ソ連軍によってシベリアに抑留され、強制労働を強いられていました。

友子様は、夫の登吉様が書かれた当時の手記をお持ちでいらっしゃいまして、本日は、その貴重な手記を朗読していただけるとのことでした。

限られた時間ではございますけれども、拝聴したいと思います。

関口様、どうぞよろしく願いいたします。

拍手でお迎えください。

(拍手)

【関口友子氏】 本日は、お足元の悪いところ、大勢の方にお集まりいただきましてありがとうございます。

命の尊さ、残された人たちの無事でとの願い、それぞれに苦勞してきた、あの日、あの時。平和な時代になると忘れるようになり、また語る人も少なくなっています。戦争に遭い、苦勞をし、内地に引き揚げてきた人の話を、大切に後世に伝えたいと思います。

それでは、始めます。

シベリア抑留記、「今日も生きて」関口登吉。

ピッニー駅よりソウガニー駅間には、山また山の間を通り、海岸に通じる軍専用の線路がある。汽車の車内は皆、二段から三段の寝台で、車内の中央に大きなストーブを置き、薪をたくさん燃やしながら、どの車両も煙突から煙を吹き出し進行している。

フンガリ駅で下車をした私たちは、全部で500人であった。昼でも暗くシラカバ、アカカバ、モミ、マツの密林であった。

この収容所は、小高い山の平地に、丸太を積み上げてつくった建物が10棟ある。旧ロシアとかドイツ兵の囚人収容所として使っていた各部屋の内壁には、南京虫のすり潰した跡が多数あり、ぷーんと悪臭が鼻につく。

到着後、約1週間ばかり仕事がなく、毎日降る雪空を眺めては内地の父、母、兄弟の面影や故郷を想いながら暮らしていた。

入浴も開戦前に入った以来入らず、日本人全員の衣服には、たくさんのノミが湧いていましたが、皆平気でいた。これが、旧日本人の軍人とは思えない有り様であった。

この収容所は、満州部隊、北鮮部隊、樺太よりきた警察官の集団収容所などで、3年も会わない戦友ならば、「ヨウー」、「ヨウー」と互いに別れるだけ。本当に生きているというだけで、楽しみのない生活が続いていた。

寒さは日一日と加わり、俺たち、一生一代の地獄の巻である。

いよいよ明日から本格的な作業が始まるからと、医務室へ集合と言われて全員身体検査を受ける。1級、2級、3級。1級者は作業量100%、2級者は80%、3級者は60%、4級者は作業なし。人間も牛馬も、働く動物には、みな等級がつけられる。女の方は、男より各級の20%ずつ少なくなっている。もし、この量よ

り、たくさん仕事をすると、休息の権利またはお金をたくさん貰える。各小隊にはノルマがあり、作業量によって食糧が貰える。ノルマが少ないときには、その小隊全員の食糧が少ないので、全員一生懸命であった。

ソ連の法律第1条に、働かざる者食うべからずの原則がある。

今日も1日作業で疲れて、全員収容所に戻り、夜食の番が来るまで寝台に横になり、目を閉じると、すぐに眠気が来る。

食堂の鐘がガンガンと響き、「それ夜食だ」と毛布を蹴飛ばし、食堂へ急ぐ。モロコシの雑炊をすすりながら、内地のぼた餅の話をしながら、楽しく食べ終わる。

また寝台に戻り、明日の苦しい作業も忘れて、1枚の毛布にくるまり、深き眠りに入るころ、突然、野外でパン、パン、パンと銃声が聞こえた。

収容所内の一同が、一斉にがばっと跳ね起きる。何事が起きたのか、何だろう。銃声、砲声のあの激戦も、まだ二、三か月前のことだけに、この真夜中に何が起きたのかと全員驚くのも無理ではない。自分も上着を着て、外へ出てみると、月光でよく見える鉄鋼の柵の下に、一人の銃殺された者がいた。

そのうちに、銃声の音にて、ソ連の将校と兵隊が多数駆けつけてきた。訳を聞くと、<sup>せきの</sup>関野上等兵だという。

関野は、二、三日前より、下痢のため、一日に六、七回便所へ行っていた。今夜も便所へ行くと、二十名から三十名が並んでいるので、関野は便所の裏へ行き、鉄条網の柵の下へ行く。途端に見張り台のソ連の兵隊に三発撃たれたのであった。

関野の死体は、地区作業本部にて解剖された。

このように日夜の生活にまで、ひとときも油断ができない。

しかし、どうせ日本に帰れないならば、死んだ方がましだ。牛馬のように毎日

使われて、最後に栄養不足で死ぬのなら、鉄条網の下へ行き、ソ連に撃ってもらいたい気持ちが誰にもあったことだろう。

しかし、我々は生きてさえいれば、いつかきっと帰る時が来るだろうと、また気を持ち直し働いた。

月日は流れ、仕事もだんだん慣れてくる。毎日泣き言ばかりも言っていられず、食べる楽しみ、帰るときの楽しみの二つを目標に暮らした。

月日が経つのは早く、昭和21年、第一回目の正月を北の果てシベリアで迎えた。モロコシ、魚、バレイショの雑炊と黒パンにて正月を祝う。11時に全員が食事を終わり、午後1時より食堂にて演芸大会のコンクールが行われる。このとき、各芸人が五、六名いた。

昔々亭桃太郎さん。東屋喜多八さん。東屋喜多八さんたちは、一番元気があって、昔々亭桃太郎さんは、私たちと旧軍隊から一緒であった。とにかく一日だけ楽しく過ごした。

二日より平常通り作業が始まった。

気温は零下58度。日本の抑留所では零下50度以上で仕事は休みと定められているが、零下50度以上の朝はロシアの人が寒暖計を隠すので分からない。今日は全員作業に行けというので全員作業に出ていく。

各作業所は、近いところで二キロ、遠いところで四、五キロの遠い山の中。皆は伐採作業であったが、私は馬での作業。切り倒した太い木を馬のソリで運び出す。高い山の上から、長い丸太を細い道へ出すのは命がけである。丸太にまたがり、長い手綱で馬をあやつりながら、下の広い道路まで運び出す。

一日四回から六回ぐらいやると日が暮れて、先が見えなくなるころ一番事故が多い。馬が足を滑らせて、人馬ともに丸太に引きずられながら、谷間に消えていく人も少なくなかった。何十メートルと雪が積もっている谷間では、とても探し

に行けぬ。五月か六月の雪解けごろでないとなしに行けないのである。

また、伐採では、切った大木が倒れてきて木の下敷きになり死んだ人も、約三年間で七、八人はいた。

私は、この気の毒な同胞の死体を地区本部まで運んだことが数回あった。

地区本部は、フンガリの収容所より80キロ、約20里離れたところにある。馬の餌を十分に積み、死体を乗せ、その上に乾いた草を被せた。前方に自分が座って、収容所を出発したのは、ちょうど朝の五時ごろであった。

西北に連ねた山の頂上には、上弦の月が青い光を放ち、星がキラキラ光っている。馬は地区本部を目指して1本の山道を一目散に走り、自分は、どうか無事で本部へ到着できるように、と祈りつつ走った。上っては下り、下っては上る坂道を夢中で馬を飛ばした。馬の吐き出す息が凍り、雪だるまのように真っ白になる。

幾つかの谷を越えて、また坂道を上ろうとした時、馬が急にストップした。何事かと四方を透かして見ると、山の峰の中ほどに、2頭の大きな犬が自分の方を見つめている。このときばかりは全身が寒くなり、頭から足の先まで硬くなった。そのうちに大きな犬が一吠え、二吠えすると、むこうの山でも、こちらの谷でも吠え合っている。まるで獲物が来たお知らせのごとく。自分は持ってきた干し草とソリの下から油の布を出し、火をつけた。大きな犬は、この火を見ると、たちまち遠い谷間へ鳴きながら逃げ出した。

東の空が明るくなり、夜明けである。シベリアの山中は、冬の日が短くて夜明けが遅い。思わず「しめた」と思った。もう八時ごろである。また馬を走らせた。

ようやく、山や谷を越え、広い川に出た。この川も、今は氷が張り、自動車も馬車も自由に通れるが、氷が溶けると船の渡し場となる。見渡す限りの銀世界で、太陽の光を受け、その反射で目がまぶしい。

前方にソ連の民家が小さく見えるころ、馬の速度を緩めた。この部落でいつも

休憩するので、少し早い昼食を済ませ出発した。

地区本部へ着くころには、日がとっぷりと暮れていた。本部の正門にはソ連の衛兵がいかめしく立っている。訳を話して中へ通る。解剖室へ運ぶと、速やかに解剖にかかる。ソ連の医者と旧日本の軍医が、色々な書類を書き、外務省へ送る。

私は、この本部で一泊して、また朝早くに出発した。帰りは馬も喜ぶがごとく、速度が速い。

二里か三里進んだころ、ロシアの娘が一人急がしげに歩いている。娘が馬の足音に気づき、手を挙げて「止まれ」と言う。素知らぬふりをして通り過ぎようとしたら、娘は大きな声で「101の収容所の日本人、なぜ止まらぬのか」と言うので、私は驚いた。何十里と離れたこのところで、なぜ自分たちの収容所番号を知っているのか。不思議なので、約50メートルも行き過ぎたところで、馬を止めていると、娘が来た。「何ですか」と聞くと「503支部まで乗せていってください」と言う。別に帰りは急ぐこともないので、馬のソリに乗せてやることにした。娘に「私が101の者だと、よく知っている」と聞くと、娘は、このソリの形で分かると言った。

このシベリアでは、車でも、ソリでも、個人の私物は一つもなく、皆、国の物で、いわゆる国民の物であるから、通行中、誰でも手を挙げたら乗せてやらなければならぬ法律ができていう。ロシアには、私物と私用はなく、平等の共産主義の国であることが、私にもやっと分かった。

この娘は、地区政治部長のワローニィ大佐の長女、19歳、ミレイだという。やはり支部へ仕事の連絡に来た帰りである。ロシアの話を聞きながら503支部へ到着した。

この娘と別れて何十キロ走ったか。自分の収容所へ帰り着いたのは夜の十時ごろでした。

このようなあらゆる仕事をしているうちに、冬も過ぎ去り、我らの期待する春が訪れた。雪も氷も溶け出し、全ての落葉樹の新芽が出始め、野にも山にも小さな草が生え、どこからともなく飛んできて私たちを慰めてくれる小鳥。

私たち全員は、作業の帰り道、どんな草でも摘んでくる。炊事係は、この野草を塩でよく茹でて食事に出す。冬の間は、この草がなく、ビタミンCが不足して壊血病にかかる人が多いため、松の葉を煎じて全員に飲ませたが、これからは野草を毎日食べられる。

しかし、春の期間は少ない。春だと喜ぶうちにやがて夏となる。

人類の悩みの種である。屋内では南京虫、山ではピロプラズマを媒介するダニ、また黒ダニがたくさん出る。ヤブ蚊も出てくる。そのうちに、シベリア名物の毒ブヨが雲のように出てくる。実際、シベリアはブヨと倒木の多いところである。仕事に行くときには、防虫服のようなのを着て、顔や手に機械油を塗っていくが、汗で溶け、実に苦しい。

このような苦しい仕事をしていたが、私はソ連の所長の命により通訳代理となり、収容所近くの川から、毎日、水を運ぶ仕事をするようになった。職名は水運び「ワタボーズ」である。

収容所で使用する飲料水とソ連の炊事場、ロシアの民家の飲み水と、私とほか二名で毎日運んでいたのも、鉄のカーテンの国の様子もよく分かった。ロシア人も日本人の気持ちをよく知るようになり、親しみ合うにつれて、血も涙も情けもある、やはり同じ人間であることが分かった。

シベリアの夏は格別に暑い、山には蛇やカエル、カタツムリがたくさんいる。栄養不足の折り、日本人には大変ありがたかった。

このような生活で、一年無事に過ぎ、二年、三年と働いているとき、昭和23年6月1日、突然、私たち全員に帰国命令が出た。

シベリア鉄道から引き込み線に、貨物列車が20両入ってくる。全員、目を丸くして喜んだ。今まで一か月働けば帰す、一年経てば帰す、と三年も働かされたのであるから、また、これも嘘であろうか、どこかへまた移動するのではないかと、本当にしなかったが、とにかく、車内の寝台を二段にした。乗車準備が終わるころ、他の収容所から1,500名も、帰国のため当所へ集まってきた。

引き込み線から本線まで300メートルもあるところに、ロシアの住民、軍人、婦人、子どもたちまで、見送りの人たちがいっぱいいた。手を振る人も、ハンカチで涙を拭いている人もたくさんいた。

水運びをしていたからか、フンガリ地区のロシア人は、皆、私をよく知っている。「ワタボーズ、水運びの関口、水運びの関口」と叫びながら、皆、手を振っていた。

汽車は歓呼を後に、南へ南へと爆進を続けた。

4日後、ナホトカ港に着く。既に先着の部隊も来ていて、引揚船の順番を待っている。

6月の末、引揚船、永徳丸が入港してきた。日本人の服装、身体検査等が行われる。「長いこと、本当にご苦労さまでした」と迎えられ、引き揚げた私たちのために、たくあん、みそ汁、米の飯が用意されている。忘れもしない日本の味に生きていてよかった、よかった。夢ではないだろうか顔をつねってみた。

玄界灘を過ぎ、ようやく水平線の彼方に日本列島が細長く、かすかに見えた。甲板の全員が、「日本だ」、「祖国だ」、「万歳」、「万歳」と高らかに叫び出した。

船は全速力で舞鶴港を目指して進んで行く。日の丸の小旗を振りながら、幾隻も迎えに出てきた日本赤十字の小舟、白衣の看護婦さん、「ご苦労さま」、「お帰りなさい」とハンカチを振る人、手を振る者、エンジンの音で互いの声もはっ



きりと聞き取れぬが、感激の渦であった。

いよいよ舞鶴港の岸壁に船が横付けになり、祖国の土を踏むことができた。一緒に帰って来られなかった仲間のこともあるが、勝利の帰国と違って、敗戦の引揚げは複雑な気持ちであった。

引揚者は、直ちにDDT（※注1）による消毒やら予防注射を済ませ、一通りの手続が済んだら入浴である。シベリアで小さな桶に一杯のお湯で体を洗っていたのと違って、たっぷりしたお湯に身を沈め、長い間の疲れと汗と埃を洗い落とし、ようやく我に返って次第に落ちつきを取り戻す。

翌朝から、それぞれの調査、家族との連絡等があり、懐かしい我が家にたどり着くことができたのでした。

戦争は絶対反対、平成30年8月8日水曜日、平和祈念コンサート、文化センター一大ホールにて朗読、関口友子。

【司会】 今ひそひそ話をしまして、おいくつかとお話ししてもいいですかといいましたら、許可をいただきました。92歳でいらっしゃいます。

これからも、貴重な話を伝えていってください。ありがとうございました。

もう一度盛大な拍手をお送りください。

（拍手）

以上

※注1 DDT シラミなどの防疫対策として用いられた殺虫剤